希望が見えない時は

今夕は受難日の夕礼拝を神様にお捧げしています。今からおよそ 2000 年前の今日、イエス様は十字架につけられて殺されてしまいました。それは、それまでイエス様に付き従っていた者にとってはこの上なく絶望的な出来事だったことでしょう。今日はマルコによる福音書を聖書個所に取り上げさせていただきましたが、あえてイエス様が十字架の上で死なれる場面だけではなく、イエス様の埋葬の場面もお読みいただきました。これには理由がありまして、毎年受難日の夕礼拝でイエス様の十字架の場面を取り上げた後は、イースター礼拝でイエス様復活の場面を取り上げますので、なかなかイエス様の埋葬の場面は取り上げる機会がなかったのです。今年はぜひ埋葬の場面も読みたいと思いまして、受難日の今日、イエス様の十字架に続く個所として、イエス様が墓に葬られる場面も聖書個所に取り上げさせていただきました。イエス様の十字架を前に絶望に叩き落された弟子たちがイエス様復活の希望を与えられるまで、その時間というものが実はどのようなものであったのか、これを見ながら今の私たちへのメッセージを考えてみたいと願います。

さてイエス様の十字架の出来事、それは既に申し上げましたように、イエス様に付き従ってきた人々にとっては絶望以外の何ものでもありませんでした。このことをしっかりと押さえておくために、まずはここで、イエス様がお受けになられたこの十字架刑について、少し詳しく説明しておきましょう。実は今月 10 日の婦人会の総会でも同じような説明をさせていただいたのですが、今日はその総会に出席されていない方もおられますし、またたとえ総会に出席された方であっても、これは何回お話ししても良いくらい大切なことと言いますか、私たちが押さえておくべき重要な事柄だと思いますので、ここでもう一度時間を取ってお話ししておきたいと思います。

十字架刑というのは、当時ローマ帝国が恐怖政治の一環として行っていた非常に残酷な処刑方法です。この刑は、ローマの平和を脅かす反逆者などに適用された処刑方法でした。イエス様は、表向きはローマ帝国に反逆を企てた政治犯として、十字架の

上で処刑されたのです。それは、イエス様の運動が大きくなり、ローマ帝国から目をつけられて軍隊を派遣され、自分たちユダヤ人がすべて滅ぼされてしまうことを恐れた、また、彼が自分を神の子、メシアだと自称して神様を冒涜していると考えたユダヤ教指導者たちの企みによるものでした。

恐怖政治の一環として、十字架刑は公開処刑で行われます。ローマ帝国の恐怖を公に植え付けるという目的から、当時、十字架の縦木は、城壁に近い高台や目立つ場所に常に設置されていました。死刑囚は縦木に付けられる罪状書きと一緒に、十字架の横木を担いで刑場まで歩かされました。そして、十字架につけられるのですが、死刑囚は両手首と両足首を釘で打ちつけられ、体を支えられなくなることで呼吸困難に陥って死に至りました。そのため、長引く場合は、48時間程度も苦しみ続けて死んだと言われています。

マルコによる福音書11:25によりますと、イエス様が十字架につけられたのは午前9時のことでした。罵られ、ひどい苦しみに苛まれ、息が絶えたのは午後3時のことです。この時、イエス様が「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫ばれたことが聖書には記されています。実に、イエス様は6時間も十字架の上で苦しみ続けられ、この上ない絶望の中で息を引き取られたのでした。それはイエス様を信じていた者にとって、何もかも終わりに思える出来事だったことでしょう。

その後、大きな失意の中、ヨセフという人が勇気を出してピラトのもとに行き、イエス様の遺体を引き取りに行きます。ピラトの許可を得たヨセフは亜麻布を買い、イエス様を十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作ったお墓の中に納めて、そのお墓の入口に石を転がしてふたをしました。マグダラのマリアとヨセの母マリアがそのイエス様の遺体を納めた場所を見つめます。

そして土曜日の安息日。不思議なことに、マルコによる福音書ではこの土曜日につ

いて何も語られていません。「準備の日、すなわち安息日の前日」、金曜日にイエス様が十字架刑に処せられ、葬られたことを記すと、物語を日曜日に移してしまいます。大きな絶望の中にあった人々を、そっとしておきたかったからでしょうか。イエス様の最期を見守った婦人たち、逃げ出して、イエス様の最期も見届けなかった弟子たち、それぞれがそれぞれの思いを抱えて、大きな失意と絶望の内に土曜日の安息日を過ごしました。

しかし、「人の子は安息日の主でもある」と仰られたイエス様は、この土曜日の間も愛のために働いておられたのです。一度私の前任地の教会である信徒の方から、「イエス様は三日目に死人の内より蘇られたわけですが、その間何をしておられたのですか？」と尋ねられたことがあります。復活するなら、何ですぐに復活してくれなかったのか。金曜日に死なれて、日曜日に復活される。そのようにあえて土曜日という時間を挟んだ理由は何なのかというわけです。これは実は、使徒信条に告白されています。ここで使徒信条に告白されているイエス様の、金曜日から日曜日までの出来事を思い出してみましょう。「主は……ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ」、これが金曜日です。そして土曜日、「陰府にくだり」、「三日目（すなわち日曜日）に死人のうちよりよみがへり」。ここから明らかなように、イエス様は土曜日は「陰府にくだ」っておられたのです。それは今生きている人々、これから生まれてくる人々だけでなく、既に亡くなった人々をも陰府の世界の幽閉状態から連れ戻し、イエス様がお救いになるため、神様の救いの御業の及ばないところがまったくなくなってしまうために他なりませんでした。このように人々が絶望のただ中にあっても、実はイエス様は陰府の世界にまで下られて、その救いの御業を行っておられたのです。このように希望のまったく見えない中にあっても、実はイエス様がへりくだって、下にまで降って救いの御業のために働かれたことを私たちは押さえておきたいと思います。

イエス様に従ってきた人々が大きな絶望を経験したように、今の私たちにも希望がまったく見えない経験をすることがあります。この出来事のどこに救いがあるのか、

このような出来事の中で神様はどこにいらっしゃるのか、それらがまったく見えない経験をする時があります。そのような時、十字架の出来事から復活の出来事まで三日という時があったように、再び希望が見えてくるまで、私たちはしばらくの時を待たなければなりません。しかしその時にも、実はイエス様が私たちの下にまで降って働いておられることを私たちは信じたいのです。静かに、忍耐強く、イエス様を下に探しましょう。私たちの見えないところでイエス様が私たちを根底から背負い、支えてくださっていることを信じましょう。そして、神様がこの先に必ず希望を置いてくださっていることを信じて待つのです。

イエス様が十字架で磔にされた日、イエス様のそばにいた女性たちや弟子たちだけでなく、すべての人がイエス様が死から蘇るというかすかな希望すら抱くことができませんでした。十字架刑が希望と期待のすべてを打ち砕き、人々は完全に道を失い、落胆させられたのです。イエス様のお墓に蓋がされた、それは人々の道が、希望が完全に蓋をされた、そのことを象徴しているかのようです。しかしイースターの朝、その墓石は蹴破られます。終わりの中から新たな始まりが芽を出していきます。それはいつでも、私たちキリスト者の人生を象徴するものに他なりません。私たちにとっては終わったと思ったところが実は終わりではなく、やがてそこから新たな始まりが芽吹いていくのです。そのことをいつも信じて、神様のもと、辛い時、苦しい時に支え合いましょう。どのような時もイエス様に背負われて、互いに愛し合うその愛の中を歩んで参りたいと存じます。

祈りましょう。　　――以下、祈祷――